

主任者 コーナー

シリーズ “放射線と向き合っ” [第4回 序]

本シリーズでは、東京電力(株)福島第一原子力発電所事故以降、一般の方々がどのように放射線と向き合ってきたかを紹介している。第4回目は宮城県白石市越河にお住まいの古山智子さんをご紹介します。小・中学生(当時)3人のお子さんのお母さんである。

越河は福島県との県境に位置している。原発北西部の地域では、2号機から放出された放射性物質を含んだブルームが降雨によって地表面に沈着を起し、高濃度汚染地域を形成したが、越河もまたこれにより影響を受けた土地である。宮城県の南部地域では、県境をはさんで国や自治体のモニタリング態勢や被ばく線量測定・健康調査などへの対応が福島県内と大きく異なったことが住民の間に深刻な不安としこりを残した。宮城県では津波の被害が大きかったことや風評被害による農産物の売り上げ低下を懸念するあまり、原発事故対策への県の対応はことごとく後手に回った。被ばく線量測定・健康調査についても、住民との話し合いや十分な説明もないまま早々に「影響はなし、必要はない」と断定した。事故から間もない3月23日に宮城県産農産物の放射能調査を実施するかどうかを巡り、「調査は、やらない方がいい。やっても余計に騒がれるだけだ」と言ったことが報道された。このことは倫理的な問題を孕んでいるとともに、このような態度が放射線に関する話題をタブーにしてしまった。似たようなことは宮城県だけではなくほかの県でも起きていたのかもしれない。

放射線と向き合うことは、影響があったことの社会的コンセンサスがなければ成立しない。影響がないということであれば、放射線と向き合う必要もないからである。しかし、「ない」と宣言されても影響があったことを裏付ける情報や報道は次々に流れて来た。放射線と向き合うこと自体憚られる中で、ずっと暮らし続けなければならなかったことが大きなストレスを人々に与えたこと、同時にこれらが放射線に対するリスク認知を上げる一因となったことは間違いない。

(東北大学大学院 吉田浩子)

第4回 県境で分断された被災者

あまりに違う対応、このままで本当にさすけねの!?

古山 智子

1. 原発事故前ののどかな暮らしが事故で変わってしまった
まず最初に私の住んでいる越河こすごうがどういった

場所にあるのかをお話いたします。国道4号線・東北本線が走り、福島県と宮城県が接する宮城県側の県境線上に越河は位置しており、白

主任者 コーナー

石市に属しています。盆地の福島から県境までは峠になっており、冬には雪が多く降ります。小学校の周りには田んぼが広がっており、1年を通してのどかな風景を見ることができます(図1)。震災に見舞われるまで自然災害で甚大な被害に遭うこともなく過ごして来ました。小学校では地元で採れた柿を地域の方の協力の下、干し柿にしたり、学校の近くに田んぼを借りて地域の方から指導を受けながら米を栽培したりしていました。これ自体も大きな学びではありますが、その干し柿や米を販売し、その収益金で絵本を購入して6年生が保育園に読み聞かせに行き、その絵本をそのまま贈呈するという正に地域ぐるみの学習が行われておりました。越河の自然環境、地域の方々の真心など、越河ならではの“和”が保たれていました。そんな中、東日本大震災、引き続いて東京電力(株)福島第一原子力発電所の事故が起きたのです。幸い、下校前の小学校の子供たちは先生方の的確な避難指示により全員が無事でした。あのような震災で、家屋などへの被害はあったものの、子供たちが無事だったことはやはり越河が恵まれた場所にあったからだと思っております。本当の災害は今も続く放射能汚染によってそれまでの時代と今とを、また県境によっての余りに違う対応で被災者同士分断されてしまったことだと思います。

震災翌日、長男の先生方が安否確認に歩いて自宅までおいでくださいました。その際に既に原発についてメルトダウンの危険性を話していた先生がいらっしゃいましたが、それがどういふことなのかよく分かりませんでした。地震の衝撃から落ち着く間もなく、原発の電源が失われた状態から、水素爆発という悪夢のような現実が次々につきつけられました。チェーンメールなどでは安全だという情報が回っていましたが、直ちに影響はないという政府見解も



図1 山を抱え、田に囲まれたのどかな越河
中央が越河小学校、校舎下を走るのが4号線、
手前が東北自動車道

ありましたので、大丈夫だろうという気持ちがあり、水を汲みに子どもと外で並んだりしておりました。今考えると正確な情報が余りに足りなかったことが悔やまれます。そのうち、越河でいったいどの程度の線量があるのかを知ることができないことに、大きな不安を感じるようになりました。私たちには放射線量を測る術もなかったのです。宮城県庁に電話で県境付近を計測して欲しいと訴えたのですが、「ガソリンもありませんし、原発から100 km離れておりますから大丈夫です」という回答でした。確かに宮城県庁のある仙台市は原発から100 km離れていますが、私たちの住む越河は原発から約65 kmなのです。このときアメリカは80 km圏外への避難勧告を出していましたので私たちも決して安全とは言いきれないのではないかと不安がいつそう大きくなりました。小学校校庭での計測が始まったのは4月21日、事故から1か月半以上たってからのことでした。

原発事故後しばらくして放射能汚染は単に原発からの距離だけではなく、そのときの天候や風向きによって変わってくるという情報が入ってきました。汚染の度合いを色別で示した地図では、その汚染は原発の北西方向に広く広がっ

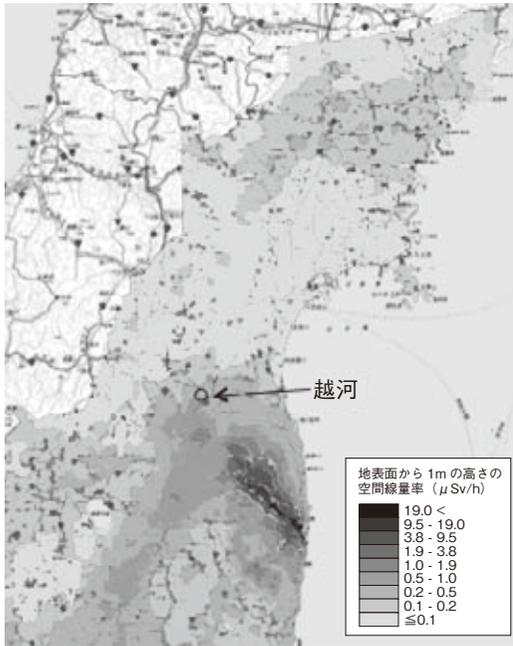


図2 文部科学省により発表された2012年12月28日時点での東北地方の空間線量マップと越河の位置(原図はカラー、モノクロに作製)

ており、越河の町もその中に含まれていました(図2)。これを知ったとき心臓がバクバクし、とにかく、放射能から子供たちを守らなければならないと思いました。ところが、4月に地域で開かれた放射能に関する講演会では、「放射能問題についてあんまり騒ぐな」と言われ、まったく理解しがたいことであると同時に皆が同じように考えているわけではないことを知ったのです。

2. 県境を跨いだ放射能対策の大きな差

子どもは県境を越えてすぐの福島県伊達郡国見町内で会社を経営しております。自宅からは自宅のある白石市の中心部に行くより、この国見町の会社に行く方が近いくらいです。毎日、宮城-福島県境を往復しているうちに地元新聞

での放射能の情報量や自治体での放射能対策に2つの県でかなり開きがあることが分かってきました。新聞だけではありません。私は、当時小学校のPTA会長を務めており、隣の国見町にある小学校にどのような放射能対策を取っているかを電話で伺ったことがあるのですが、学校の先生のお答えは「外での活動は登下校を含め時間制限している、春に校庭で実施される運動会を秋に屋内で実施される学習発表会と交換して、外での活動を増やさないようにしている」とのことでした。しかし、宮城県側ではそのような対策はまったくとられておりませんでした。運動会の実施時期についてPTA役員間で協議しましたが、結局意見はまとまりませんでした。その原因の1つは、宮城県側の放射能に関する情報の少なさでした。

4月によりやく始まった小学校での計測も、校庭1か所のみでの計測に限られており、学校内のほかの場所は測られていませんでした。PTAの親の立場からせめて教室なども測って欲しいと市へ要望を出しましたし、福島県では実施が始まっていたバッジによる子どもの被ばく線量調査もお願いしました。またその後、福島県ではだんだんと開始されていた校庭の除染についても、早急な実施をお願いしました。けれども私たちのこれらの要望は「宮城県は大丈夫だ、問題ない」の一言で全て却下されました。すぐそばの国見では国や県をあげて実施されていた全てのことが宮城県側では取り上げてすらもらえませんでした。県境を跨いだこの差を思うたび、不安やいらだちは増すばかりでした。たぶん、宮城県側としては汚染されていることを公にするような除染、数値が分かる計測などはできればしたくないのだろうと思いました。それが高じてだんだんと放射能に関わることは口に出すことができないような空気になっていきました。福島県の人に「よくそんなんでも黙って

られるね」と言われたことがありますが、地域の人たちからも「風評被害で野菜や米が売れなくなるから騒ぐな」と苦情を言われ、福島県側では黙っていてもことが進むことを仕事を休んでまで要望活動をしなくてはいけないこと、そしてその要望の大半が受け入れてもらえないことなどが大きなストレスとなっていきました。けれども騒ぐ騒がないに関わらず、2011年10月に越河から採取した米ぬかから暫定規制値を超える放射性セシウムが検出され、また2011年産新米からも新たな基準値を超えるものが見つかり、風評被害ではなく実害が出たことにより結局野菜や米の売り上げは大幅に落ち込んだのです。

3. 暮らしの中で放射線と向き合っていく

事故後早い段階で、福島県では多くの地点で空間線量の計測が始まり、個人のバッジ型積算線量計が配布され始めました。越河でも配って欲しいと思いましたが、宮城県や白石市には断られたので子供の被ばく線量がどれぐらいか知ることができずにいました。9月になり、東北大学大学院の吉田浩子先生のチームが丸森でのバッジ型線量計による計測を開始したという新聞記事を読んで、直接お電話で越河の計測が可能かどうかご相談をいたしました。空間線量も大切ですが、実際の被ばく量を知ることがなにより大切だと思ったからです。12月から希望者には線量計を配布していただくことができました。それから2年になろうとしていますが、続けていくうちにいろいろな問題点も出てきました。1つは子供たちが装着しなくなってきていることです。せっかく計測するデータにもかかわらず、きちんと装着できていないことから正確な値が測定できないのでは何にもなりません。子供たちには難しいことではありますが、なぜ線量計を身に着けなければならないのかの

意識付けをしていくことが大切だと思っています。同時に吉田先生の研究室から簡易型のサーベイメーターを借りて地域内の線量の測定を保護者で開始しました。定期的に役員間の家庭を線量計を回して計測を実施しています。線量計は安価ではないため、簡単には購入できません。大学からの支援を受けて測定できることは大変心強いことです。

事故前の暮らしを思い起こしますと、自宅では田畑があり両親が育てた野菜や山々の季節ごとの山菜なども家族でおいしく食べておりました。しかし、今は“念のため”こういったものは食べておりません。食品に含まれるセシウムを測る装置が近くにないためです。白石市役所には装置があって測定してもらえるのですが、往復1時間以上掛かること、そしてすぐに計測結果が出るわけではないことを考えますとそうそう毎日行くわけにはいきません。食品中の放射能を測る装置が身近にあれば、きちんと計測して食べられるのですが。測らないまま食べることは特に子供たちにはやはり控えたいと思うのです。目に見えない放射能と向き合っていくのは本当に困難だと思います。

4. このままで本当にさすけねの!?

(さすけね=差し支えないのか の方言)

放射線はやはり県が違っても場所ではなく線量による対応を考えるべきではないでしょうか。私の子供たちが通う越河小の南隣の小学校は福島県伊達郡国見町の大木戸小学校でした(現在は町内小学校へ統合となり閉校となりました)。ここでは、事故直後の7月には校庭除染があり、0.1 $\mu\text{Sv/h}$ 程度になりました。越河小での線量は4月の時点で0.95 $\mu\text{Sv/h}$ 程度でしたが除染は大変遅く、線量が半分ほどに減った翌年7月に覆土方式の除染がやっと実施されました。それまでの線量を考えると子供たちが

学校で受けた被ばく線量は福島県側よりも多かったことになるかと思います。健康調査についても、宮城県は実施していませんが、福島県がやってこっちがないというのは本当にさすけねの？ と不安になってしまいます。

福島県の除染進捗状況は余りよくないように思います。それはやはり除染で出る廃棄物の処分方法がしっかりとしたものではないということも原因の1つだと思います。住宅地での除染では、その家から出たものは原則そこに置くことが多くなっておりませんが、いつまでそこに置いておくのかもはっきりしないとこれもまた不安だと思います。しかし、子供たちにはなるべく放射線を浴びさせたくありません。それなら除染も大切ですが、例えば寝る時間を過ごす部屋（子供は8時間は寝るとしますので、1日の3分の1を過ごす場所でもあります）の線量を下げるため、外部からの放射線を遮断する物質でできたカーテンを支給するなど、少しでも線量を下げるための施策も必要ではないかと思えます。

5. 様々なご支援に感謝

このような苦悩を震災後報道番組で話したことが縁で、越河の子供たちを保養に連れて行っていただく支援を得ることができました。また、2014年1月に甲状腺エコー検査を含む健康診断を各自がその検査代を負担してではありますが希望する児童を対象に実施していただけるようになりました。全校児童の約65%が受診する予定です。現時点での状況を把握してお

くことが必要だと思う保護者が多いということだと思います。こうした現実を公表しなければ実現しなかったことではありますが、私たちの置かれた状況を真剣に考えてくださった方々のおかげだと感謝いたしております。

6. これからの暮らし

この地に住む以上は、今後もずっと放射能と向き合っていかなければならないのです。「放射能を気にするストレスの方が心配」という声も聞かれますが、毎年インフルエンザの季節になれば予防の情報量も増していきます。それと同じでこの地にいるからこそ、放射線から身を守る正しい在り方を一人ひとりが知らなければならぬのだらうと思います。震災報道も風化しつつありますが、放射能の問題は今現在も進行中として取り扱っていかなければならないと思っております。地域内でも一人ひとりと話していると心配している方は多いのですが、置かれている立場や地域内での立場から声を出すのはためられるという方が少なくありません。辛いことですが、タブーとしてはいけないことだと思います。きちんとした計測などデータをいかにしながら、健康へのリスクを少なくしていくことは今後も努力していかなければならないことだと思います。どうか、放射線に携わる皆様の知恵を結集していただき、これからの時代が安全、安心、健康なものとなっていくようにしていただければと思います。科学で子供たちを明るい未来へ導いていって欲しいと思います。